



TITLE:

東亞天文協會觀測部月報

AUTHOR(S):

CITATION:

東亞天文協會觀測部月報. 天界 1939, 19(214): 123-127

ISSUE DATE:

1939-01-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167767>

RIGHT:

観測部月報

★

東亞天文協會

★流星課だより (88)

課長 小 槇 孝 二 郎

二月は流星が少い。上旬まきを座の北部から放射する流星群があるがあまり著しくはない。速度の甚だ速いのが特徴である。

× × ×

竹原の吉井氏から十月の観測を受取つた。氏が同月 18 日から 27 日に至る間八回に亘つて観測された結果によれば、オリオン群の出現状態は次の様であつた。

日	開 始	終 了	オリオン群	一時間平均	F	修正平均値
十月18-	21時30分	1時30分	8	2.7	0.7	3.9
19-	22 55	2 25	33	9.4	0.8	11.8
21	22 30	24 0	15	10.0	0.7	14.3
22	22 30	24 0	12	8.0	0.8	10.0
23	1 42	3 42	53	26.5	0.8	33.1
23-	22 30	0 15	13	7.4	0.55	13.5
25-	22 25	2 25	15	3.8	0.6	6.3
26-	22 30	2 40	15	3.6	0.8	4.5

出現程度は大體例年並と見てよく極大は 22—23 日の夜にあつた。

吉井氏は又別に 20 日及 23 日の兩朝 4 等以下の微光流星を目當に輻射點の精密決定を計畫され次の様な結果を得られた。(天頂引力の修正なし)

萬國時 (U. T.)	赤 經	赤緯 (分點 1938)	流 星 數	精 度
十月 19.78	90.0	+ 15.4	6	良
" 22.73	94.9	+ 14.5	4	不 良

大聖寺町の島崎光治氏の十一月の観測中 15 日のものの中に特に牛座流星群が多い。

吉井氏によれば此の年(1938年)の獅子座流星群は意外に多く、極大豫定日の17日は毎時30個以上も見られた。同様な事は歐米からも報ぜられた。23日の島崎氏の觀測中にも獅子座群に屬するものが若干含まれてゐる様である。

特筆すべきは同17日の夜吉井氏が3個の獅子座流星を撮影せられたことである。これによつて寫眞的に幅射點が決定出来るから甚だ貴重なものである。以上の事柄によつても昨年の獅子座群が豫想外に顯著であつた事が知られる。

十一月の19—20日夜同じく吉井氏はオリオン流星群($\alpha=90^\circ$, $\delta=+12^\circ$)を9個を得てゐる。1925年にアメリカに於て認められたものに近いので注意をひく。

十二月に入つて島崎氏は14日、自分は14日及15日夜に双子座を觀測したが光度の大なるものはなかつた。寫眞觀測は不成功。出現程度は例年並のものと判斷される。

以上の外鹿兒島の坂上務氏から十月のオリオン群觀測を、大阪市の林田一氏から火球1個を、同じく大阪市の西尼利夫氏から十一月2日及22日の觀測を、静岡縣の大石辰次氏から火球の報告を夫々受取つた。(XII 29, 1938)

★太 陽 課 (1938年12月)

報告者 13名(前月と同じ)

新報告者 阿部正明氏(東京市池袋8の2401)器械 32mm 屈折 45 倍投影法である。同氏は今まで約2ヶ年練習の結果、明年度より正式に報告の筈。

天候 低氣壓の足並みが早かつた爲めか? 全國的な曇天なく、全員で補へば、缺測日なしの好成績であつた。但し、冬季としては普通の狀況であると思はれる。

概況 平均相對數は、前月よりも再び2割方減少した。従つていよいよ來年度に興味が持ち越される事となつた。

肉眼的黑點	坂上	津留	正村	合計
觀 測 日	19	12	15	46
出 現 日 數	4	7	14	25
黑 點 群 數	1	3	8	8
黑點群累計數	4	7	20	31

觀測者が少し尠ないが、平均すれば觀測日と出現日數の比は0.54であつて相

太陽課 黑點相對數報告 (1938年12月)

觀測者 (觀測地)	阿部 正明(東京市池袋)	森久保 茂(東京慈惠醫大)	御供 印孝(東京市立一中)	堀田 泰生(橫濱市東寺尾)	淺居 正雄(橫濱市神戶上町)	杵掛 七二(長野縣青木村)	大石 辰次(靜岡縣吉永村)	島崎 光治(石川縣大聖寺町)	山田 達雄(愛知縣犬山町)	正村 一忠(岐阜市溝旗町)	木邊 成磨(滋賀縣中里村)	織田 太郎(大阪市明星商業)	野村 秋馬(和歌山市南川邊)	草場 修(廣島縣瀬戶村)	津留 繁雄(熊本市本莊町)	坂上 務(鹿兒島市山下町)
口徑 mm	32	70	50	38	102	55	75	64	35 69	25	75	76	60	100	130	100
倍率	45	50	32	50	75	64	64	64	44 87	48	60	75	62	45	45	67
1	曇	曇	曇	(器	90	90	曇	曇	曇	曇	缺	曇	曇	91	58	曇
2	曇	曇	曇	械	90	90	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	107	81	曇
3	108	81	113	缺	105	105	64	80	65	52	113	曇	曇	99	77	108
4	曇	曇	曇	缺	76	76	曇	曇	報	49	86	(器	曇	49	82	曇
5	曇	曇	曇	缺	曇	曇	曇	曇	告	曇	135	械	曇	76	82	曇
6	104	99	47	故	曇	曇	53	88	告	45	126	展	缺	92	131	104
7	124	131	76	障	曇	曇	88	90	未	缺	151	會	曇	116	89	124
8	曇	曇	曇	修	曇	曇	曇	曇	未	曇	95	出	曇	110	曇	126
9	139	123	142	中	曇	曇	62	曇	未	曇	缺	品	曇	138	曇	139
10	曇	曇	曇	理	曇	曇	106	曇	未	曇	曇	中	曇	140	曇	曇
11	172	146	132	中	曇	曇	122	曇	未	曇	134	中	曇	168	曇	172
12	曇	曇	曇	中	曇	曇	94	曇	未	曇	曇	中	曇	124	曇	曇
13	曇	曇	曇	中	曇	曇	89	曇	未	曇	曇	中	曇	146	曇	曇
14	168	138	110	中	曇	曇	102	曇	未	曇	133	中	曇	173	曇	168
15	173	139	86	中	曇	曇	140	曇	未	曇	88	中	曇	136	曇	173
16	曇	曇	曇	中	曇	曇	133	曇	未	曇	101	中	曇	126	曇	曇
17	117	曇	曇	中	曇	曇	81	曇	未	曇	162	中	曇	缺	曇	曇
18	91	曇	曇	中	曇	曇	125	曇	未	曇	140	中	曇	72	曇	曇
19	曇	曇	曇	中	曇	曇	曇	曇	未	曇	60	中	曇	84	曇	曇
20	曇	曇	曇	中	曇	曇	曇	曇	未	曇	147	中	曇	曇	曇	曇
21	曇	曇	曇	中	曇	曇	103	曇	未	曇	缺	中	曇	曇	曇	曇
22	曇	曇	曇	中	曇	曇	雨	曇	未	曇	77	中	曇	曇	曇	曇
23	曇	曇	曇	中	曇	曇	雨	曇	未	曇	90	中	曇	曇	曇	曇
24	曇	曇	曇	中	曇	曇	曇	曇	未	曇	103	中	曇	曇	曇	曇
25	121	曇	曇	中	曇	曇	63	曇	未	曇	66	中	曇	曇	曇	曇
26	106	曇	曇	中	曇	曇	曇	曇	未	曇	68	中	曇	曇	曇	曇
27	93	曇	曇	中	曇	曇	56	曇	未	曇	88	中	曇	曇	曇	曇
28	91	曇	曇	中	曇	曇	55	曇	未	曇	59	中	曇	曇	曇	曇
29	94	曇	曇	中	曇	曇	55	曇	未	曇	71	中	曇	曇	曇	曇
30	102	曇	曇	中	曇	曇	54	曇	未	曇	60	中	曇	曇	曇	曇
31	111	曇	曇	中	曇	曇	47	曇	未	曇	50	中	曇	曇	曇	曇
觀測日數	19	10	21	14			8	21	14	14	23					
一日平均	118	105	101	101			64	74	106		101					
前月平均	123	123	115	80			84	91	140		125					

當に多い。但しいづれも先月の様な大群は出現しなかつた様である。其れは各觀測者によつて差が甚だし、事に依つても推知出来る。先月に現れた大群は未だ相當な火さを示して、上旬から中旬にかけて再び面上に現はれ、肉眼にも認められた。中央通過は7~8日であつた。是れが本月中最も大きなものであつたらしい。

南北兩半球の比較	津留	木邊	島崎	杵掛
南	67.7	58.3	40.8	62.1
北	37.5	42.3	23.6	43.9

南北の比は、南 **1.00** に對し北 **0.64** であつて、前月とは逆に、可なり南半球に多くなつた。極端な高緯のものは出現しなかつたが、低緯度のものは、25日東端に出現、翌年に持ち越された一群であつて、南3°位と計られた。（杵掛、堀田、阿部氏全部一致す）

其他、津留氏はスケッチ、阿部氏は disk 全面のスケッチ、杵掛氏は各黒點の緯度を報告された。又、堀田氏も一部の群に就て緯度の報告を寄せられた。

訂正。天界 211 號、黒點相對數表中、野村氏 9 月 11 日 36 は 22

天界 213 號、黒點相對數表中、津留氏 11 月 2 日は 156, 19 日は 143, 20 日は 91 に訂正。相對數平均も 123 と訂正。

★變光星課 (1938年12月)

天候が不良であつた爲めか、少し不成績らしい。其上未だ報告が出揃つて居らないのと、他の課の記事の都合上、詳報は次號で發表する。

來る3月頃極大の豫想されるミラ型の星の中で好位置に來るものは

星名	時期	極大光度(概略)	參考
V Cnc	3月下旬	7.5	
RS "	3月下旬	5.5	變光範圍少、觀測は熟練者向き
X Mon	3月下旬	7.5	小口徑向き
L ² Pup	4月中旬?	4.0	豫想極大期不確實、熟練者向き
R Vir	3月上旬	7.0	

(以上 木邊)

★遊星面課月報 (12, 1月)

本枯吹く寒夜、冴え返る星辰に誘はれるまゝ、望遠鏡を引出し、ちよこまる手にラツクビニオンを操つて、やつと視野に入る星々の姿が餘りにも悪いのに驚く程、冬夜の氣流状態は悪いのが常例で、稀に良いコンディションにも打つかるが、其れが餘りにも尠い。

當課も、3—4月のシーイング轉換期迄は、例年通り冬眠を續ける。その代り冬眠から覺むれば、早や火星は、15年振りの大接近のプロローグを奏でつつ、日一日と接近の歩を進めて來てゐるから、直ちに戰闘準備に取りかゝらねばならない。今年は、火星探究の急先鋒たる、京都の前田、九州杵築の渡邊兩氏が名譽の應召に火星觀測スタッフが著しく弱くなつたので、勢ひ、一昨年度及1935年度の接近の際、觀測に加はつて下さつた方々は勿論、新觀測者の進出を大手を擴げて大歡迎する次第である。

觀測のプランは1937年度と大差はないが、より以上完璧を期し度く思つてゐる。詳細は號を追つて逐次發表の豫定。何しろ視直徑24秒(と云へば、木星の視直徑の約半分強)と云ふ大きさになるし、先年來は淡いデリケートな模様の多い北半球を見せてゐた火星が今度は濃い、ダイナミックな模様と著しい色彩を呈する南半球を見せる様になつてくるのだから、是非共小口徑も總動員して觀測に従つて頂き度い。猶ほ、觀測についての詳細は、「觀測手引」欄に、號を追ひ記して行く事になつてゐます。

1938年度の木星土星及金星の見取圖は、熊本市の津留繁雄氏(13極反射鏡使用)、鹿兒島市の坂上務氏(10極反射使用)、及大分縣中津市の中野繁氏(10極反射使用)の3氏から可成多量に報告を頂いてゐる。これは整理の上、次號に發表する事にします。(伊達)

山本會長の銀婚祝宴

去る1月2日、本會長山本一清博士夫妻は折から京都滞在中の南米ペル1國前總理大臣 Riva Aguero 博士を歓迎慰勞する晚餐會を近江のビワコホテルで催され、本會員藤井善助氏、吉田悅藏氏等京津地方の諸名士をも招待されたが、會々吉田氏の發意により之れは山本博士の銀婚の祝ひをも兼ねられ、盛會であつた。